

# 戦中派世代の生き方を考える

十年後の変化に期待する理由とそれまでの養生について述べてみたい。

中西 喜彦



## (一)はじめに

日本人の寿命が平成二十二年で女性八十六・四歳、男性七十九・六歳となつた。日本人が七十五歳まで生きる割合は男性で七二・一%、女性八六・五%。九十五歳までは、男性八・〇%、女性三・〇%。三天死因は（がん、心疾患、脳卒中）らしい。これで死亡する確立は男性で五四・〇%、女性で、五〇・九%で、ほぼ半分を占めると南日本新聞七月二十七日の一面で取り上げられた。わが「炉ばたセイ談」庵主人来院重朝氏の二十年後を見てみたいと言う提言に賛同する筆者は、二

## (二)戦中派世代の過ごした時代

筆者は支那事変の始まつた昭和十二年に生まれ、昭和十六年の第二次世界大戦参戦時代を経て、昭和二十年（一九四五）の敗戦を小学校三年生で迎えました。この年の六月筆者は福岡市中央区で空襲を受け、がれきと死体の山に遭遇しました。取りあえず敗戦から二十年ごとに時代を区切つてこし方を思い出してみます。

二十年後の昭和四十年（一九六五）佐藤栄作首相が戦後初めて首相として沖縄を訪問しています。前年に東京オリンピック開催を成功させ、国鉄東海道新幹線が東京・大阪間を四時間で走っています。また、この年は筆者が鹿児島大学に赴任した年でもあります。昭

和四十三年（一九六八）は二十三年振りに小笠原諸島が日本に復帰しました。G.N.P（国民総生産）が四十三兆円に達し、西側世界第二位となり「昭和元禄」とも言われました。一方では、東京大学で学生が安田講堂を占拠し、卒業式が中止になる等全国的に学生運動が吹き荒れた時期でもありました。昭和四十五年（一九七〇）は大阪万博で日本が世界に文化面でも紹介され賑わいました。

さらに、四十年後の昭和六十年（一九八五）は中曾根内閣全員による靖国神社公式参拝が話題を呼びました。戦後三百六十円で固定されていた円が急騰し、二百円の大台を超えた。科学万博「つくば博 85」が開幕し、東京・両国に国技館が落成しました。

六十年後の平成十七年（二〇〇五）自民党は小泉純一郎首相のもと、総選挙で郵政民営化を旗印に衆院総選挙で与党（自民党、公明

（三）戦後の価値観とは

戦後の日本を説明するのに堺屋太一氏の提言は大変参考になります。まず、著書「大変な時代」で少子化、高齢化、情報化、国際化のキーワードで戦後の社会現象を説明してい

る大勝を納めました。愛知万博（愛・地球博）開催の年でもあります。

その後、福田内閣、安倍内閣、麻生内閣と短期政権が続き四年後の平成二十一年（二〇〇九）衆院選で民主党が歴史的大勝利を納め政権交代が行われました。民主党、国民党および社会党による連立鳩山内閣が発足しました。ちなみにこの時の円相場はドバイショックで十四年振りに一ドル八十四円まで上りました。しかし、鳩山内閣も長続きせず、菅内閣に交代し現在に至っています。現在為替は一ドル八十円を割つてしましました。

ます。さらに一昨年著書「凄い時代」で、世界は全く新しい次元に入ったと述べています。知価革命なる概念を用いて、米英が知価社会化したのに対して、日本や中国、さらにアジア諸国は「物財の豊かなことが人間の幸せ」とする近代工業社会を完成させるに留まっているとしています。米英では一九八〇年代から知価社会の「人間の幸せは満足の大きいこと」と考えるようになり、「欲しい時に買い、後で支払う」のが「利口な生き方」となった。

この二つの価値観の違いが益々大きくなつて製造者と使用者の國に別れ、両者間の経済摩擦となっています。

これを別の切口で表現すると、我々は、戦前の軍国主義への反省のもと、民主主義、自由、豊かさを旗印に、平等、個人主義、経済成長を押し進めて来ました。その結果、上下関係（家族関係）の崩壊、過度の競争、都市

集中となっています。さらに、農村は疲弊し、食料自給率は低下し、家庭崩壊、学級崩壊、いじめ、格差、無関心、老人の孤立、自殺と日本社会が崩れて行く感じがします。このような現状から我が国と他国との違いを考えてみましょう。

#### (四) 日本文明の特徴

本誌6号で筆者は文明比較の切口として牧畜民族と稻作民族で説明しました。今回は歴史的重層性について考えたいと思います。

現在先進国といわれる西欧諸国とは如何なるものでしょうか。十四世紀頃からスペイン、ポルトガルに始まる大航海時代からイタリア、仏、独、英國の産業革命、米国の独立に至っています。その後、第一次、第二次大戦を経え、冷戦を乗切った米国の大國化となり現在に至つて居ます。前述のように知価社会化

して、米国では究極のサブプライム・ローンで國の財政まで危うくなっています。

これらの國は日本の歴史で言えば室町時代以降に宗教戦争、民族戦争を繰返しながら少しづつ領土を固定しながら発展して来ています。

日本は周囲を海に囲まれた列島国家であるため民族移動は歐州のように陸続きでなく限られています。信長、秀吉、家康と強力政権が出来てからは領主の領土替えや参勤交代などによりかなりの支配層が集団で移動しています。その結果、大和朝廷成立以来現代まで共通の価値観を育成して来ています。既に、

ある人は排除されて来ました」。しかし、一度目標に合意が得られれば一人一人は非力でも粘土のように固まって行動します。一方、中国は四千年の歴史を持つとは言え多民族国家であり、王朝が変ると価値観も変わり、個人個人は力があつても砂のように固まらない。また、欧米も多民族国家であり、サラダボーラーのように中味が完全に一つになることはない。中味は多種多様でも建前だけは理想を高らかに掲げる強力なリーダーを必要とする。このようにしてみると他国では頼れるものは個人や血縁あるいは宗教以外の帰属集団はない。

室町時代には日本文化の基礎は確立されたと考えて良く、江戸時代以降をみると政治的には強力なリーダーを育成していないように感じます。全体責任性（合議性）を重んじる伝統があります。司馬遼太郎流に言えば「くせ

これに対して、我が国では幕藩体制から現代に至るまで、合議体制を四百年以上維持している。その結果、帰属集団が職場であつたり、地域だつたり、学縁だつたりする。血縁や宗教以外にも帰属意識が持てるようになつ

ている。現在でも地方主権と言つてゐる各県知事が判断の難しい重要な案件には、國がと言つたり、地元民がと言つたりして自分の見解を述べず後だしジャンケンに徹する様に良く現れる。

今回の東日本大震災は戦後日本社会が築いて来た価値観を大きく揺さぶりました。いみじくも哲学者の梅原猛氏が今年一月に新哲学創造の理念として日本文化を形成する思想の本質は「草木国土悉皆成仏」と言う天台本学思想にまで立ち返るべきであると発表しています。

それは、自然環境破壊の原因として、「科学技術文明を理論づけたデカルト以来の近代哲学が間違つてゐる」と警醒しているのである。自我のある人間中心の世界。さらに神と人との世界觀には限界があると言うのである。仏教では輪廻の考え方で仏、人、動物までは世界

觀に入ります。しかし、我が国では仏教伝来前に数万年以上前から続く縄文文化の影響を受けており、それが仏教伝来時の天台仏教の中で生かされていると指摘している。将に今回の大震災は、天罰、と言う例えが適切かどうかは別として、人間のみならず草木国土に仮性が有るように思われます。また、これは能の中でもつとも良く表現されているとも述べています。例えば、有名な能「高砂」では松の精が尉や姫の姿であらわれます。能「杜若」では花の精が歌人在原業平の姿で現れます。これは豊かな四季を持つとともに、天災にも晒され続けた日本列島の歴史を反映しているものと言えましょう。これを要約すると自然を征服するのではなく、自然と共生しながら生きる文化ではないでしょうか。

また、衆生本来無一物と言うように、人は裸で生まれ、裸で死んで行く。地位、名譽あ

るいは蓄財も夢幻の世界という仏教文化を今  
回の大震災は思いださせてくれました。

五歳まで生きている必要がある。すなわち、  
それまで生きる確率は八%である。  
その養生法について考えてみたい。

#### (五) 何歳まで生きるか。

巷に云われている温泉の暖簾等でみる『人  
生は六十歳から、七十歳にして、お迎えあれ  
ば留守と言え。八十歳にしてお迎えあれば、  
まだまだ早過ぎると言え。九十歳にしてお迎  
えあれば、そうせかずとも良いと言え。百歳  
でお迎え来るときは、時期を見てこちらから  
『ぼつぼつ行くと言え』とある。しかし、六十  
歳を過ぎると肉体と知情意が一致しない現象  
が現れ出す。これは一般的に六十歳定年と云  
われる時期を境に一応人としての子供の育成、  
社会維持の役から己にどう人生での落とし前  
を付けるかという境があると云う事であろう。

さて、何処で手を打つものでしょう。筆  
者にとって、冒頭の二十年後を見るには九十  
歳に老後を過ごしたいと言うのは万民の  
希望するところである。冒頭の主な病気の種  
類はいわゆる生活習慣病と言うものである。  
これは個人の遺伝的な素質と食生活、睡眠、  
社会生活などの総合的なものである。すなわ  
ち、養生が必要というものである。

#### (六) 桜沢如一による養生論

文芸春秋特別版「大養生、第81巻9号、  
二〇〇三」で桜沢如一の『宇宙の秩序』と養  
生論（石田英湾著）を紹介したい。石田氏は  
お米を正しく食べよう会を主宰しておられる  
が、日本の風土にあつた食事が養生の基本と  
言う考え方である。著者はその中で桜沢氏  
の健康の七大条件と言う指標を紹介している。

筆者はこれを日々実行することで何とか八%の生存率にかけたいと思うのである。

肉体の健康（①絶対に疲れない、②ご飯がおいしい、③良く眠る）。精神の健康（④物忘れをしない、⑤毎日が愉快でたまらない、⑥判断も行動も常にスマート）。心身総合（⑦うそをつかない）

この七つの指標を毎日チェックして過ごす事が養生の基本と言う訳である。さらに最後の項目は神仏や真理に恥ずかしくない行いをしたかと言う事である。言い換えれば、生涯、真善美を追求すると言う生活態度である。

感覚を思い出す。當時を考えると衣食住の心配の少ない今は天国に居るようなものである。前述のように民主主義と生活の豊かさを求めて、この約五十年を頑張つて来た。西欧世界に追いついてみると日米欧の国家は債務超過に陥り、明日の予測がつかない状況である。中国については吉本隆明氏が言うように約三十年遅れてついて来ている状況ではなかろうか。ロシアについては未だ強権で押さえつける体制から抜け出していない。

それぞれの國の優劣を論じても余り意味は無い。日本文化を稻作文化の粹とすると歐米文化は牧畜文化の完成されたものと言えよう。前者が虫の眼を持つとすると、後者は鳥の眼を持つてゐる。稻作においては個々の農家が細かい田んぼの手入れや収穫をおこなう。一方、牧畜には良い牧草地を求めての集団移動や家畜の群管理にはより臨機応変な対応が必要である。

## (七) おわりに

要である。これらのDNAが色々な事象に反映していると思われる。このような文明間の生存競争が今後どのようになるのか是非この動きを見てみたいものである。

もう一つの興味は世代間の価値観の違いである。戦中派世代の次は全共闘世代、ノンボリ世代と続く。戦後生まれの世代は戦争を経験しなかった。しかし、堺屋太一氏は今度の東日本大震災を、「第三の敗戦」と名付ける。戦後処理のお手並み拝見と言うところである。

時あたかも「日本中枢の崩壊」と言う告発書が現役の経産省官僚によって講談社から出版された。現在の主役全共闘世代に対するノンボリ世代の反乱のようにも見える。いずれにせよ焼け野原を経験した世代としては内外の潮流の変化を注視し、健全な隠居を目指したいものである。

